

すると戸のすきまから入って来たのは、一匹の野ねずみでした。そして大変小さな子供をつれて、ちょろちょろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみの子供ときたら、まるで消しゴムくらいの大きさしかないので、ゴーシュは思わず笑ってしまいました。すると野ねずみは何を笑われたのだろうというよう にキヨロキヨロしながら、ゴーシュの前に来て、青い栗の実を一粒、前において丁寧にお辞儀をして、言いました。「先生、この子の具合が悪くて死にそうなのでございます。先生、直してやってくださいまし。」「オレは医者じゃないんだ。そんな

ことが出来るか。」ゴーシュは少し
ムツとして言いました。すると野ね
ずみのお母さんは、下を向いてしば
らく黙っていましたが、また思い切
ったように言いました。「先生、そ
れはウソでございます。先生は毎日
あんなに上手にみんなの病気を直し
ておいでになるではありませんか」

「何のことだか、サッパリわからん
ね。」「だって先生、先生のおかげ
で、うさぎさんのおばあさんも直り
ましたし、たぬきさんのお父さんも
直りましたし、あんな意地悪のみみ
ずくまで直していただいたのに、こ
の子ばかりお助けをいただけないと
は、あんまり情けないことでござい

